
エレベーター

真崎麻佐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エレベーター

【Nコード】

N5498C

【作者名】

真崎麻佐

【あらすじ】

雑居ビルに取材に行った私は、古いエレベーターに乗る。エレベーターの中で私が体験したのは…？

これからお話することは、私が体験した出来事です。本当は恐ろしくて口にも出したいくないのですが、仕方無い、これ以上こんな経験をやる人を出さない為なのです。だから先生、どうか彼女が成仏出来ますよう、宜しくお願いします。

それは、蒸し暑い夏の日のことです。私は雑誌記者という仕事上、様々な場所に行くことがありました。だからその日も、普段と同じように取材に行きました。いつもと違ったのは、そこが薄暗い雑居ビルだということだけです。私が用があつたのは、五階の古本屋、その雑居ビルには古いですがエレベーターがあつたので、それを利用することにしました。あの時、何故階段を使わなかつたのかと後悔しないことはありません。階段を使つていたとしても、同じだったかもしれないが。

古いエレベーターに乗り込むと、中の電球はチカチカと点灯し、ぼんやりと見渡せる位の明るさでした。扉の閉まりも遅いので、あれ？おかしいな、と思いました。しかし元々、オカルトだとか、そういうものを信じていなかつたので、ただエレベーターが故障しないかだけが心配でした。エレベーターの扉はゆっくり閉まつて、五階のボタンを押したのですが、なかなかライトが点きません。ガチャガチャと何度も押して、ようやく点いて、エレベーターは静かに動き始めました。

エレベーターはガタンガタンとか、ギシッギシッといった不気味な音を鳴らしながら昇って行きました。それにしても、とてもスピードの遅いエレベーターです、エレベーターの扉の開いたガラスの枠

から二階の様子がよく見えました。三階も同じです。各階も薄暗く、汚れていました。しかし、多くの雑居ビルに行ったことのある私は特に気にすることはありませんでした。

様子が違ったのは四階です。早く五階に着かないかと、少し苛々としていました。携帯を取り出していじっていた所、やっとエレベーターが止まりました。五階に着いたのかと顔を上げました。しかし、エレベーターの扉は開きません。扉越しに見えるのは、一人の、女性。俯いて泣いているかのように見えました。エレベーターに乗りたいのかと思い、私は扉を開けてあげようと思い、ボタンを押しました。ところが扉は開きません。ボタンは反応しているのに、です。私はどうしようかと困りました。女性は一向に顔を上げる気配がありません。

私は仕方が無いので、先が上がってしまおうと、扉を開けることを諦めました。しかしボタンを押すのを止めても、今度はエレベーターが動かなくなりました。私はエレベーターの扉越しに女性と向かい合っている形になり、どうも気まずく、余り彼女を見ることが出来ませんでした。目の隅に見える女性は、紅いワンピースを着ていました。やはり下を向いたままです。

ガタンとエレベーターが動き出しました。やっと動いたか、と顔を上げた次の瞬間、私の頭は一時停止したのではないかと思えます。初めて目が合った紅いワンピースの女性は血の涙を流していたからです。よく見ると、ワンピースの赤も血のような色でした。私はエレベーターの端に後退りしました。エレベーターはゆっくり上へと昇って行きます。私の目は、彼女から離せません。エレベーターが五階に着こうとするギリギリの所で、彼女の口がゆっくりと動くのが見えました。

五階に着き、エレベーターの扉がゆっくり開かされると、私は逃げ出すように外へ出しました。目的の古本屋は、ビル自体に似合わず、少し感じのよい所でした。私はその店主にエレベーターの中での出来事を話しました。すると店主の顔色が変わりました。そして同時に憐れみのような目を向けて言いました。あなたは彼女に会ったのですね、と。店主に聞いた話も曖昧です。彼も噂話程度にしか聞いたことがないらしいのです。だから、紅いワンピースの女性はこの雑居ビルで不幸にあったのだということしか分かりません。

どうでしょうか、先生。お願い出来ますか？彼女があの時、私に何を伝えようとしたのか、気になります。

そういえば不思議なことがあります。私の行った古本屋が無くなっていました。雑居ビルのオーナーもそんな店は知らないと言いました。雑誌に載せる為に撮った写真にも、何も写っていませんでした。全てが不気味なことで満ちています。

(後書き)

「行つては、ダメ」

それは彼女からの忠告。

彼女を傷つけたのは、古本屋。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5498c/>

エレベーター

2010年12月24日03時18分発行